

第3 問題作成部会の見解

1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

- 英語以外の外国語については、『筆記』テストを課し、「リスニング」テストは実施しないが、以下のように可能な限り外国語によるコミュニケーション力を評価する。
 - ・コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、情報や考えなどの概要や要点、詳細、話し手や書き手の意図などを的確に理解する力を引き続き重視する。
 - ・併せて、高等学校において、「聞くこと」「読むこと」「話すこと [やり取り]」、「書くこと」を統合した言語活動の充実が図られることを踏まえ、情報や自分の考えを適切に表現したり伝え合ったりするために、理解した情報や考えを整理したり、何をどのように取り上げるかなどを判断したりする力を重視する。
 - ・また、コミュニケーションを支える基盤となる知識や技能についても、引き続き評価する。
- 問題は、高等学校学習指導要領「外国語」の目標及び内容等に対応したものとし、CEFR 等を参考に作成する。

また、大学教育を受けるために必要な能力を把握できる問題とするが、高等学校において英語以外の外国語を初めて履修する者もいることも考慮し、多様な入学志願者の学力を適切に識別できるようにする。

2 各問題の出題意図と解答結果

令和7年度の共通テストは、例年同様、高等学校でドイツ語を学んだ受験者の基本的能力を正確に把握することを目標とした。高等学校学習指導要領（外国語編）で示される目標：外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動及びこれらを結び付けた統合的な言語活動を通して、情報や考えなどを的確に理解したり適切に表現したり伝え合ったりするコミュニケーション能力を養う等の目標の達成度を多面的に評価することを心がけた。

作問に当たっては、高等学校学習指導要領（外国語編）を基準に、高等学校ドイツ語教育関係者の意見を参考にし、過去の共通テスト評価資料の分析も手掛かりにして、問題レベルを適正にするよう心がけた。出題語彙の範囲については、日本独文学会教育部会作成の「基本語彙集」、各種独和辞典の重要語彙、Goethe-Zertifikat B1の語彙リストを参照し、受験者に過度の負担がかからぬように配慮した。並行して全般的に、具体的な状況においてドイツ語を理解し、自ら表現する力を問う問題を出題している。

上記の基本方針を踏まえ、各問題は、次のような意図に基づき出題されている。

設問数と配点については、文法2問11題33点、作文3問6題18点、コミュニケーション7問8題40点、発表5問8題30点、データ読み取り5問7題35点、長文読解6問8題44点とし、全体の設問数は28問、解答数は48題である。

上記の基本方針を踏まえ、各問題は、次のような意図に基づき出題されている。

第1問：基本的な文法知識及び語彙力の習熟度を問う。

第2問：基本的な文法知識に基づく、文の運用能力を問う。

第3問：会話の内容を総体的に捉え、日常会話の基本表現や基本語彙を活用する能力などを問う。

第4問：複数のソースから情報を収集し、それを整理し発表につなげる能力を問う。

第5問：文章や、それに関するデータから必要な情報を選び出す能力を問う。

第6問：比較的分量のある記事を読み、その概要・要点、論理展開、書き手の意見等を把握する

能力を問う。

各問題の設問数と配点は次のとおりである。

発音・文法	第1問	2問	33点
	第2問	3問	18点
会話・コミュニケーション	第3問	7問	40点
	第4問	5問	30点
読解	第5問	5問	35点
	第6問	6問	44点

3 自己評価及び出題に対する反響・意見等についての見解

出題に用いたドイツ語の総語数は、本試験とほぼ同等である。この点について、日本独文学会ドイツ語教育部会（以下「ドイツ語教育部会」という。）より、「問題文全体のボリュームは本試験に比べ同程度であるのに対し、語彙数は100語近く減少している。これは、昨年度の追・再試験の総語彙数（640語）と同水準であり、基本語彙を中心に出题されていることが伺える。」「全体的な問題の形式は、本試験とほぼ同程度であるが、追・再試験の方が、難語が少ないために取り組みやすい試験問題になったと評価できる。」というコメントを頂いた。高等学校教科担当教員（以下「教科担当教員」という。）からは「全体の構成は大問が1つ減り6つとなり、設問数も昨年度の51問から48問となった。昨年度まで第1問にあった発音・アクセントに関する知識を問う出題がなくなった。特定の場面や状況に応じた会話や長文など、受験者には今まで以上に幅広く学び、正確な知識が求められる出題である。」というコメントを頂いている。

使用語彙に関しては、例年同様に、高等学校3年間で学ぶ範囲を中心とし、それを超えると考えられるものには注や平易な言い換えなどを利用し、受験者への過度の負担をできる限り回避するように配慮した。熟語表現や文法項目についても、高等学校3年間の学習を踏まえて理解できるものを中心とするよう留意した。

なお、平均点等の情報については、追・再試験は受験者が少ないため、公表していない。それゆえ、本試験との難度の違いや過年度の問題との比較は単純にできないが、問題作成に際しては、問題構成・出題数のみならず、難易度についても本試験と同程度であるように努めた。

設問構成と出題形式については、教科担当教員から「共通テスト『ドイツ語』にはリスニングの設定がなく、受験者にアクセントや母音の長短を身に着ける意識を持たせるためにも発音に関する出題をしてほしい。今回の試験では全体的に、語彙の難度が高いためにその知識がなければ思考しても正答には至りづらく、加えて難度の高い語彙が設問に関わる場所に繰り返し使われ解答を難しくしている。」というコメントを頂いた。高等学校でドイツ語学習を始めた受験者の学習の成果を適切に測れるような設問構成、出題形式については、今後も検討を続けていきたい。

第1問は主として基礎的な文法、語彙の知識を問う問題である。新教育課程に対応し、問題形式を変更した。各問を個別の選択問題ではなく、テキストの中に配置することにより、文法や語彙の知識のみならず、文脈に応じた適切な表現を問うている。テキストについて、ドイツ語教育部会からは「実際のコミュニケーションを想定した具体的な状況」が設定されているとの評価を得た。また、問2の格変化を問う問題では「前後の文脈から2格になることに気が付けるかが鍵となる」と

して出題意図を理解していただいた。なお、追・再試験の問2では、格変化のみならず複数形についても問うことで、問題の画一化を避けている。

第2問は与えられた語を適切に配置させることで、様々な文法知識や熟語表現を多層的に問う問題である。実際にドイツ語を運用する日常的な場面において、文の理解を前提にして個々の文法知識及び使用頻度の高い重要な表現の知識を問うている。今年度より完答問題をやめ、部分点を認めることとした。また、設問数も昨年度より1つ減らして3とした。日独の表現様式の違いに目を向けてもらうような問題も含まれている。ドイツ語教育部会からは「学習者が日常的に使用するドイツ語の表現を理解できているかを問う問題である」と出題意図を理解していただいた。

第3問では、昨年度の共通テストと同様、連続性のある会話の解釈を問う形式となっている。場面設定は、IchiroとYukaが教員であるYilmazに留学相談をする前半部分と、留学後に三人が集まり振り返りをする後半に分かれている。近年留学をする大学生が減っていることを受けて、留学には様々な形態があり、それぞれ良い点があることを伝える意図を込めて出題した。ドイツ語教育部会からは「2つの正答の選択肢はそれぞれ1つ目と2つ目の会話文の内容を反映し、また、YukaとIchiroの双方の体験について把握していることを求める良問である。」との評価を頂いた。全体的な評価として、教科担当教員からは「場面の切替えが分かりやすく、また図やスマホのメモ等が間に入っておらず対話に集中しやすい。登場人物も3名であり一貫してゼミナールについて話をしているため本試験よりも読みやすい印象を受けた。使用語彙もそこまで難しくはない。」と好意的な評価を頂いた。ドイツ語教育部会からは「本試験と比較すると、追・再試験はやや解きやすい問題となっている。」と好意的な評価を頂いた一方、「ただ、会話文において教員は学生に対してduを、一方、学生は教員に対してSieを使用しており、呼称の非対称使用がやや気になった。」との意見もあった。

第4問は、プレゼンテーションのためにフォーラムに参加するという形式になっている。テーマは、日本とドイツの企業で働くというものである。会話文の後にメモがある。この問題はプレゼンテーション能力を問うためのものであるが、形式についてはまだ検討の余地がある。テーマの設定については、ドイツ語教育部会の指摘にあるように、高校生が自身の将来と結び付けることができる。ドイツ語教育部会や教科担当教員の意見にあるように、メモにおける略語は文脈から読み取らねばならず、受験者の負担も大きかったと思われる。ドイツ語教育部会、教科担当教員からともに良問と評価された。問5は会話全体の内容が理解できているかを問う。教科担当教員の意見にあるように、問題を解き進める中でこれまでの内容を把握できていれば、解答はそれほど難しくない。全体的な評価としては、本試験と比較して全体的に平易であることが課題としてあげられる。本試験とのバランスについて、より一層考慮することが課題である。

第5問では、本文とグラフデータの双方から各段落の内容を正確に理解できるか、グラフの数値のドイツ語での表現を正確に読み取れるか、テキスト全体のテーマを問う問題を作成した。5問のうち4問は解答の選択肢をドイツ語に設定しており、本文及びグラフデータの内容を解釈・理解した上で、それをドイツ語で正しく表現できるかを重要視している。出題は、労働における男女差とワーク・ライフ・バランスの改善に対するドイツの取り組みについて述べた文章と、これに関連した3つのグラフで構成した。全体として、テキストのテーマについては、教科担当教員から「社会的な話題ではあるが、日本でも同じ状況であり想像しやすい」、ドイツ語教育部会から「昨今頻繁に議論されているテーマ」であり、「身近なトピックではあるが、女性側の問題だけでなく、家庭での時間を増やそうとする男性が直面する問題にも言及し、事態の解決には政治や社会の関与が欠かせないと結論付けているところに、論説文としての工夫が感じられる」と評価された。とはいえ、グラフの解釈を問う際に、論理的かつ客観的な基準を今以上に明示的に示せる工夫が必要だろう。

第6問では、それぞれの段落の記述内容を正確に読み取れるか、また各段落で記述されている内

容から全体の内容を有機的に理解できるかを問う問題を作成した。6問のうち3問は選択肢をドイツ語にしており、本文を正確に読み取りつつ、その意味と内容をドイツ語できちんと考え、まとめなおすことができるかを問うている。テキストには、「美」に対する新しい学術的取り組みについて論じたものを選んだ。美しいという感覚は、誰しもが経験するであろう身近なテーマである。そうした感覚と学術的研究の紹介とを結び付けることで、ドイツ語の精緻な読解を通じて具体的なレベルから抽象的な議論へと進み、論理的思考を養うことができるような問題を作成した。問題に対する全体的な評価として、教科担当教員からは文章の抽象度の高さと語彙の難度について指摘があり、ドイツ語教育部会からは少し高度な文法事項（現在分詞や冠飾詞）について指摘があった。ただし個別の問題についての寸評を見ると、多くの設問で解答が難しいものではなく、良問も含まれていると考察されている。例えば問1や問2は、本文で述べられていることとそうでないことの区別が明確で、かつ論理的思考力も問えるものであると評価されている。一方、問3については、正答に難度の高い語が使用されており、それを知らなければ答えを導き出せないとのコメントもあり、更なる語彙の難易度調整の必要性を実感した。最後に問4、5、6に関しては、難度も形式も妥当とのことだったが、問6のようにタイトルを問うのであれば本文に余計なリード文は不要との重要な指摘もあった。問題構成全体についても改めて検討せねばならないだろう。

4 ま と め

現行の学習指導要領においては、英語以外の外国語に関する科目は「英語に関する各科目の目標及び内容等に準じて行うもの」とされ、当該諸言語に応じた明確な指導目標が存在しない中、事実上共通テストが高等学校の学習目標となっている点に鑑み、問題作成分科会としてはドイツ語学習者の裾野を広げるためにも、問題内容と形式、レベルとバランスに配慮しつつ、更に良問の作成に向けて努力を続けていく所存である。